談話室

だって俺たちのもんやん

大規模農業法人の経営者たちによる，ある座談会に参加した時のことである。テーマは販売戦略についてであり，話題は農協の利用におよんだ。多くの農業法人が農協の利用に否定的であるなか，彼のみが相当部分で農協を利用しているとの発言を行った。周りの参加者がやや意外に感じその理由を問うと，彼が答えたのが「だって俺たちのもんやん」であった。

その言葉は，特に気負うことも無く，ごく当たり前のことのように発せられた。しかし，その時に感じたある種の感動と驚きは今でも忘れられない。と同時に，その驚きを感じたことに対するやましさのような感覚が強く残った。

「協同組合は組合員のものだ」とは，我々が常に語り，主張してきたことではなかったろうか。なぜそのことが一人の組合員の口から当たり前のこととして語られた時，驚きを感じてしまったのであろうか。問題は，自分がそのことを語る時，果たしてその言葉にどれ程のリアリティが込められていたのかということにある。

わが国における農協は，決して農民自身が自らの組織としてつくり上げたものではない。基層としての村落共同体との重なりは大きく，そこにおける相互扶助が活動の基盤にあったとはいえ，「おらが村」と「おらが農協」とは必ずしも重なるものではなかった。制度として国から与えられた組織に対し，「俺たちのもの」という意識が芽生えるのは決して容易なことではない。単に，一人一票の原則，出資配当制限の原則といった協同組合の外形的な基準を満たしていれば自動的に組合員の積極的な参加が達成されるというものでもない。組合員が農協を自分たちの組織として感ずるようになるためには，長い期間の組合と組合員の相互関係の積み重ねが必要となろう。

後日，彼の農場を訪問する機会があり，昔話を聞くことができた。かつて地域の若手農業者が集まり，新たな作目への取組みを行ったことがあるという。しかし，多くの困難に直面し，中々うまくいかず，挫折しそうになった。その時に支援の手を差し伸べてくれたのが農協であった。「若いやつらの挑戦を無駄にはさせない」というその時の言葉を彼は今でも忘れていない。そうした様々な積み重ねがあってこその「俺たちのもの」なのであろう。

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp

組合と組合員の関係，また組合員相互の関係も決して単純なものではなく，きれいごとで済ませられるものでもない。お互いに不満を持ち，意見の対立が生ずることもあるだろう。しかし，その際においても，互いの立場を主張し，また相互の立場を理解し合うことにより，妥協しあえる解決策に達することも可能となろう。そうした相互理解の積み重ねこそが協同組合の優れた特質であり，参加型民主主義の大きな意義であろう。

今，様々な場で「農協改革」の議論が行われている。外部の「有識者」の意見には，傾聴に値するものもあるであろうし，協同組合関係者も謙虚に耳を傾けるべきであろう。しかし，組織の形態を社団法人とするか株式会社にするかといった議論に，協同組合改革にとっての本質的な意義があるとは思えない。単協においても，また全国連においても，組合員が真に自分たちの組織だと思えるようになることこそが改革の本質であり，方向性であるべきであろう。

協同組合は事業体であるとともに運動体でもある。運動体としてのエネルギーを維持することは決して容易ではない。しかし，かつての産業革命勃興期における，農民，労働者の悲惨な状況が運動としての協同組合を立ち上げる大きなエネルギーとなったように，環境の厳しさは，逆にそれを運動のエネルギーに転化しうるものでもある。

現在の農業・農村を取り巻く環境は，かつてないほどの厳しいものとなっている。この厳しさはまた，運動体としての協同組合の活力を取り戻し，地域における農協の役割を発揮していくための，大きなエネルギーにもなりうるものではないであろうか。その過程における多くの対話が，組合員にとって組合を自らのものと感ずることに繋がるとすれば，それは農協が自らのあり方を見直していくことにも繋がっていくものといえよう。

今回の規制改革会議の改革案に対してまず感じたことは，協同組合は組合員の組織であり，その在り方は組合員自身が決めるべきものではないか，という違和感であった。しかし，そのことを真に主張しうるためには，まず協同組合自らが組合員のものであるという実感を持てなければならない。

「だって俺たちのもんやん」という言葉をごく当たり前のこととして受け取ることができるようになった時，その時にこそ，「自分たちのことは自分たちで決める」と我々は胸を張って主張できるようになるであろう。

（一般財団法人 農村金融研究会 専務理事　原　弘平・はら こうへい**）**

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp